

『月刊日本』に「疑史」を連載中

『NEW LEADER』に「陸軍の裏側を見た吉蘭周蔵の手記」を連載中

# 落合莞爾

現在、落合氏が『NEW LEADER』に連載中の記事は、今年（平成22年7月号）から第三部に入った。それは、堀川辰吉郎を頂点とする京都皇統を本邦で初めて公開してからである。第一部、第二部、第三部の違いについて、落合氏は以下のように述べる。

… 1年の休稿期間の後、第一部で得られた史的知見の相互間の有機的連関の追究に取りかかった。第一部の各個別知見は、より上位の史的地検の集合たる「歴史実体」に属するので、アーサー・ケストラーのいわゆるホロン構造である。歴史実体の解明は、まず個別知見相互の有機的関連性を明らかにする作業から始めなければならない。即ち現在連載中の第二部があるが、この作業の基本は一に懸かって洞察である。

洞察によって個別知見相互の有機的関連を仮定し、之を用いて公開資料や口碑伝聞を検証すると、今まで見えなかったものが見えてくる。つまり、同じ史料であっても旧来の解釈と異なる意味が観えてくるが、そうなると、荒唐無稽に見えた口碑伝聞にも実質が備わって来て、貴重な資料性が保証されるのである… …… 中略……

… 明治以後のわが国体は、明治天皇と京都皇統の二元方式によって運用された。京都皇統こそ薩摩ワンワールドと杉山茂丸、玄洋社などを下部集合として含む史的知見の上位集合である。薩摩ワンワールドは在英海洋勢力の一角を占めるが、その本質は国策遂行団体で、英国筋からの伝達は杉山茂丸を通じていた。茂丸が薩摩ワンワールドの誘導者になったのは、辰吉郎に最も近かったからである。京都皇統に属する下位集合として、他には大谷光瑞師が率いた京都社寺勢力、孝明帝と同系の鷹司家を初めとする旧堂上の一部、光格帝の生母大江巖代（大鉄屋岩室氏）に由来する丹波大江山衆（穴太上田氏・大本教）、公武合体を進めた会津松平氏・紀州徳川氏が存在した。その実態と活動を追究するのが、今後始まる本稿第三部の作業である… （『NEW LEADER』2010年06月号）

『ドキュメント 真贋』（東興書院）

『天才画家「佐伯祐三」真贋事件の真実』（時事通信社）

